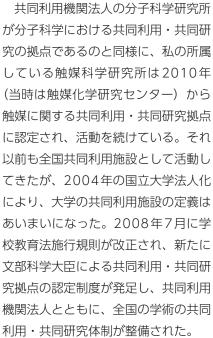
大学における共同利用・共同研究拠点 活動、共同利用機関法人の共同利用・ 共同研究

朝倉 清高 北海道大学触媒科学研究所 教授



大学の共同利用・共同研究拠点は共 同利用機関法人の共同利用・共同研究 と大きく違い、単にコミュニティーの 中核として、拠点活動を行うだけでな く、所属する大学に対する貢献が強く 求められる。これは、全国の研究者間 の結節点という役割に加えて、大学が その分野で全国の中核になることも意 味している。すなわち、研究所が中心 となり、同じ大学の教員を巻き込んで、 大学全体として共同研究を推進するこ とが望まれている。触媒科学研究所で は、研究所内に附属触媒連携研究セン ターを設置し、そこに学内の触媒関連 の先生方が参加した北大触媒アライア ンスユニットをつくり、大学内の先生 と外部の先生がたとの触媒分野におけ る共同研究を助け、発展させる仕組み

をもっている。

また、大学にある共同利用・共同研 究拠点は、大学および大学院の本来の 目的である学生教育も負担をしないと いけない。講義だけでなく、入試業務 の負担もある。当たり前に学生が4年 生から研究室にやってくる。これは共 同利用機関法人とのもう一つの大きな 違いである。若い人が絶えず出入りす るので賑やかである。

一方で、最先端装置を整えて、共同 利用に供することは大学にある共同 利用・共同研究拠点では難しい。特に 概算要求は大学を通して行うところが ネックである。競争的資金に頼ればよ いとする意見もあるが、科研費以外は 使途が厳しく監視されているので、購 入したものを目的以外の共同利用・共 同研究に供することは不可能である。 コミュニティーの強い要求があったと しても、大学全体の立場で優先順位が 決まり、高い順位で出すことは難しく、 高額な最先端装置をなかなか購入でき ない。したがって、大学の共同利用・ 共同研究拠点は、ソフトな面、たとえ ば、多様な人材を集めて、人の特色を 前面に出した共同研究が望まれる。こ の人と人とのつながりの中で、学生が 自然とかかわり、若手人材育成もおこ なわれるところに大学の共同利用・共 同研究拠点活動の特徴がある。共同利 用機関法人は、逆に、特色ある最先端 設備、装置といったハードの面で特徴 をだしていくのがよい。分子科学研究



所は1GeV未満の放射光リングで世 界最高のエミッタンスを持つUVSOR を共同利用に供し、優れた研究者が集 まってくる。

こうしたお互いの特徴を生かしなが ら大学の共同利用・共同研究拠点と共 同利用機関法人が、連携協力し、日本 の学術および科学技術の基礎研究・応 用研究を発展させることができると思 う。北海道大学では、大学全体で共同 利用機関法人である高エネルギー加速 器研究機構と連携協定を結び、加速器 教育・研究の推進、若手育成の事業を おこなっている。大学も単に共同利用 機関法人の装置や施設を使うだけでな く、積極的に連携協力していくことが 望まれる。多様な人材が共同利用・共 同研究活動を通じて混じり合い、多様 な共同研究が生まれると、予期せぬ新 展開が起こる。この共同利用・共同研 究拠点活動は、日本のユニークなシス テムであり、ますます複雑化する社会 の要請にも応え、今後さらなる展開が 期待される。

あさくら・きよたか

1981年 東京大学理学部化学科卒、1984年9月 同大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程中退、 1984年10月 同大学理学部化学教室助手、講師 1994年5月 同大学理学部スペクトル化学研究 センター助教授、1999年より北海道大学触媒化学 研究センター (現触媒科学研究所) 現在に至る 分子研には1988年2ヶ月ばかりお世話になり、 錯体の合成を行いました。その後は研究会で何度 もお世話になっております。2012年-2015年 からは運営委員にもなりました。分子研は日本の 化学研究の中心拠点として、触媒科学研究所は触媒 の研究拠点として互いに密接に協力できるように と思って参りました。